

B—60 防虫加工剤の効力判定の一方法

奈良女大家政 辻井 康子

1. イガ幼虫を使って防虫剤の防虫効果を判定する場合、供試虫の薬剤感受性が常に一定であることが必要である。そこで数種の防虫加工剤で処理した羊毛モスリンについて、食害試験を行ない、防虫試験の検討を試みた。

2. $30 \pm 1^\circ\text{C}$, $20 \pm 1^\circ\text{C}$ で飼育したイガ幼虫を用いて次の実験を行なった。

防虫加工剤、ディールモス、オイラン NKF, CNA, U_{33} , ミチン FF を、0.05~5.0% (o. w. f) 羊毛モスリンに加工し試料とした。

食害方法は 2 cm 角の試料とイガ幼虫 10 頭を 4.5 cm \times 1.5 cm のシャーレに入れ、1 週間食害させて食害量を測定した。

3. ディールモスは低濃度で効果が大きく、オイラン CNA は、5% 処理でも 10% 前後の食害がみられた。いずれの加工剤においても、処理濃度が高くなるにしたがって食害が小さくなった。20°C, 30°C 飼育の幼虫間には食害率に差がみられる。

そこで処理濃度と防虫効力の関係を対数にとると直線が得られるので、その式から防虫剤効力の比較、供試虫の感受性について検討し、二、三の知見を得たので報告する。